

あいだのすみっこ不定期漫遊連載 第66回

アカデミズムの世紀——フランス公式絵画再訪 島根県立美術館・開館10周年記念『フランス絵画の19世紀』 に寄せて(1)

稲賀 繁美

(いながしげみ／国際日本文化研究センター、
総合研究大学院大学)

島根県立美術館では現在「フランス絵画の19世紀」が開催されている(3月6日—5月31日)。冒頭に明言するなら、これは、フランス本国ではけっして実現できない展覧会である。なぜ、フランスでは実現できない企画なのか。その疑問には、おいおい答えてゆこう。コミッショナーには、フランス側は、パリ第4大学名誉教授のブリュノ・フカールが総監修、またフカールの後任を襲ったバルテレミー・ジョベール。日本側には東京大学の三浦篤。ジョベールはドラクロワとロマン主義を専攻し、フカールは19世紀のアカデミー絵画と宗教画に関する第一人者、三浦は写実主義からマネの世代さらに第三共和制下のアカデミーの崩壊過程に係わる博士論文をフランスで提出し、高度な専門誌『西洋美術史研究』のアカデミズム特集号を監修した専門家。この顔ぶれは、今回の企画を実現するのに、誇張なく現時点の世界最強トリオ。加えて、松江県立美術館には、開館展以来、時機を得ては画期的な企画を実現してきた蔦谷典子、また横浜美術館でフランス側美術館関係者と太いパイプをもつ新畑泰秀。このふたりが中心となって、現場を統括している。目録執筆には、若手・中堅の研究者・美術館員が当たって、充実した仕事ぶりを見せて

いる。これらの条件がひとつ欠けても、これだけの質量の作品を一堂に集めた展覧会を実現することは、不可能だったはずだ。さらに今回展示された作品の大半が、日本初公開。重要な大作揃いなのに、なぜ今まで招来されることがなかったのか。この疑問にも、最後に検討を加えたいが、同様の企画が将来再びありうるかどうか、もはや定かではない。展覧会そのものが歴史的な出来事であった、といえる所以である。その眼目はどこにあるのか。以下、展覧会の組み立てにしたがって論点を5つに絞りつつ、簡略に述べてみたい。

1 ルーヴル美術館の映像的記憶

まず、展覧会第一部。ここには「新古典主義の確立」との副題が見える。中心となる作品には、ギリシア・ローマの神話や古典に題材をとった物語絵画が目白押し。冒頭のドロリング(Michel-Martin Drolling 1786-1851)の《アキレウスの怒り》(1810)を見ただけで、わあこれはダメだ、と顔を顰める観客もおられるだろうか。そこには、戦前から戦後の教養主義の時代ならいざしらず、現在の日本の公衆には、もはやお世辞にも親しまれているなどとはいえない、トロイア戦争を始めとする英雄や歴史的人物が居並んで

いる。解説を読みながら物語を会得し、そのうえで人物たちの視線の交錯を理解し、歴史的瞬間たる所以を納得する手間が必要だ。

「教養」なくしては、容易に鑑賞できない絵画。やっかいで胃もたれしそうな、こうした作品群は、モダニズムの全盛期このかた、「アカデミズム」と軽蔑され、とりわけ大学紛争期には、声高に糾弾されたものだ。だが、そうした美術学校の伝統的調理法に付き合わされても、最初から食傷気味でげんなり、とはならず済む。作品としての力量が否定しがたいからだ。《パトロークロス》(ca.1779)と題されたダヴィッドの裸体習作など、ホメーロスの原作を知らずとも、アカデミーの教程が要求していたデッサンと肉付けの水準を遺憾なく納得させる。むしろ問題は、こうした技法がまったく無意味になってしまった今日なお、極東の日本にあってさえ、ゲイダイに入学するためには、同様の訓練が不可欠という時代錯誤がなお残存している、という現実のほうだろう。だが、40年前の「異議申し立て」の時代を経験した世代がいまや還暦という今日、元祖のアカデミー絵画は、別様の表情を見せる。ナルシス・ゲラン(Pierre-Narcisse Guérin 1774-1833)の大作《トロイアの陥落をディドに語るアエネアス》(1819)など、どうだろう。そこには、地中海の夏の夕べの風光が見事に湛えられている。カルタゴの女王ディドがアエネアスの語るトロイア落城の様に聞き入っている。その女王に抱かれた裸体の美少年が、画面の外、われわれに投げかける挑発的な視線はどうだろう。ルーヴルの大回廊に鎮座している、新古典派の代表格、ダヴッド(Jacques-Louis David 1748-1825)の大作《ホラティウス三兄弟の誓い》(1784)の右手には、女性たちに囲まれて、ひとりの幼児が見える。いまから生きては帰れぬ死地に赴こうとしている父の運命を知るこの幼子が、われわれに暗い視線を向ける。その名画の映像的記憶に不思議な変奏を施したのが、ゲランの本作という解釈も、あるいは妥当でしょうか。

とすれば、ここにはルーヴル美術館最後



図1 ナルシス・ゲラン《トロイアの落城をディドに語るアエネアス》(部分) 1819

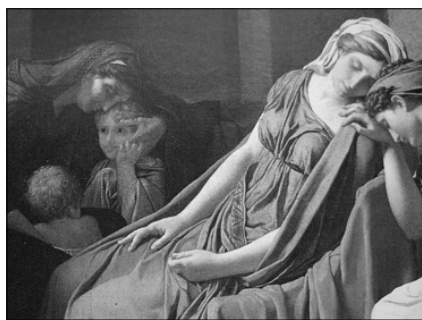


図2 ジャン＝ルイ・ダヴィッド《ホラティウス三兄弟の誓い》(部分) 1784

の19世紀絵画の大回廊を飾る大作群を髣髴とさせる名画が一堂に会していることが見てくる。もちろんルーヴルの作品がそのまま運ばれてきたわけではない。原作が話題をまくと、画家が自分のアトリエでその複製を作ることが当時の慣習だった。なにしろまだ写真も映画も発明されていない時代の話である。評判作の上質のレプリカ群が、時に寸法を縮小されて注文された。本展ではジロデ(Anne-Louis Girodet-Trioson 1767-1824)の《エンデュミオンの眠り》(1791以降)や《洪



図3 エドゥアール・マネ《デュイリリーの音楽会》(部分) 1861(ロンドン・ナショナル・ギャラリー)

*図1～3, 画面のなかの登場人物が、画面の外の観客に向ける視線の系譜。

水の情景》(1802)がその好例であり、その傍らには1801年のサロンの入り口に展示されて話題となった、アントワヌ・グロ(Antoine Jean Gros 1771-1835)の《レフカス島のサッフオー》(1801)が、惜しげもなく出現する。ルーヴルを訪れたことのない観衆や、ことさら画題に親しんでいない来館者にも、これらの作品が一堂に居並ぶ様は、圧倒的な壮観だろう。月の女神セレネーより永遠の眠りを授けられ、逢引に訪れる月光に照らし出された美青年の裸体からは、芳しい香りが発ちこめる。聖書に題材をとった大洪水の情景では、岩山を登って避難しようとする家族の姿が、一瞬の稲妻に照らし出され、現実をも凌駕する、画家の異様な構築力を納得させる。さらに失恋ゆえに断崖から身投げする女流詩人の姿は、月夜に逆光で浮かび上がる。奇しくもグロ自身、やがて自らの才能の限界に失望し、セーヌに身投げして、その生涯を閉じる。ここにはロマン主義に繋がる美意識と運命が予兆のように見えるわけだが、そのロマン主義の雰囲気さをさらに濃厚に伝えているが、ジェラルド(François Gérard 1770-1837)の《ヒュラスとニンフ》(1826)で水の精に囚われる裸体の美少年だろう。腕で小枝を掴む姿は、このあと、ロマン派のドラクロワや英国・ラファエル前派のエ

ヴァレット・ミレーが《オフェーリア》像に応用することになる意匠だ。

通常、日本から遠路はるばる辿りついたパリのルーヴル宮では、疲労に加えて、あまりに多量の作品の洪水に圧倒されて、早々に撤退するのが相場だろう。ところが松江では、居ながらにして、そのルーヴル宮の19世紀の精華を堪能することができる。とりわけ日本でも人気の高いアングル(Jean-Auguste Dominique Ingres 1780-1867)の場合には、《パフォスのヴィーナス》(ca.1852)に見られるように、未完成ゆえに、腕の配置の変更など、かえって巨匠の工夫の跡が生々しい。背中が背面から、首から肩は斜め前から、そして腕の曲線は側面から、とさまざまな視点をくみあわせて総合した裸体は、現実には存在しえない架空の美の、不穏なる魅惑を湛える。また《聖サンフォリアンの殉教》(1865)は、オータンのサン・ラザール大聖堂からの受託作品(1834)の縮小版の体裁。弟子のデゴッフ(Alexandre Desgoffe 1805-1882)との共作だが、さんざんに批判を蒙った当初の完成作を練り直した、巨匠最晩年の熟慮の一点であり、陽光に照らされた部分と、雲の影となった部分との対比を巧みに按配して、過密気味の群集表現に適切な強弱を与えようとしている。

2 七月王政期の光と闇

つづく第2部、「ロマン主義の台頭」は、とりわけ日本では知名度の低い画家たちの作品が多い。けれども、そこには創作の可能性が大きな振幅を描いて追求されていた時代相が巧みに要約されており、教育的にも質の高い選択が見られる。まず、美術学校の制度であったローマ賞の風景画部門に新鮮な自然描写の見られることを、適切な作例が立証する。アンドレ・ジルー(André Giroux 1801-1879)の《メレアグロスの狩り》(1825)など、あるいはヘラクレスの英雄譚を思い出させ、宮崎駿『もののけ姫』の巨大な猪の一発想源を照らし出す。若くして没したミシャロン(Achille-Etna Michallon 1796-1822)は1817年、第一回目の「歴史風景画部門」受賞者だが、《廃墟となった墓をみつめる羊飼い》(1816)の背後の、新緑に包まれた滝の描写には、師匠であるヴァランシエンヌが得意とした、ローマ近郊、ティヴォリの写生にも通じる、新鮮な光が溢れている。テュルバン・ド・クリッセ(Lancelot-Théodore Turpin de Crissé 1782-1859)の《バッコスとアリアドネの結婚》(1834)は、一転して秋の紅葉

の下の収穫を描くが、画面中央に描かれた立ち木には、どうしたわけか、月桂樹に変貌したダフネを思わせる擬人化が施されている。ミシャロンの弟子に कोरोー (Jean-Baptiste-Camille Corot 1796-1875) が居り、村内美術館蔵の《少年と山羊》(1847)、《刈り入れ時》(1850-55)が展覧されているが、ここからは、19世紀後半の風景画の発展への道筋を辿ることもできるだろう。

風景画の展開の傍らで、第二に、流派の並列が顕著となった様子も的確に再構成されている。新古典派のアングルと競ったロマン派の雄・ドラクロワ (Eugène Delacroix 1798-1863) については《シビュレと黄金の小枝》(1838)1点が展示されるに留まるが、これは長らく公開されたことのない作品であり、現在日本に存在する貴重な作例。その黄金の枝の描写には、ドラクロワの卓抜かつ大胆な筆捌きを満喫できる。新古典派とロマン派とのあいだで主導権争いが演じられるかたわら、1830年代からは中庸派と称すべき傾向が顕著となる。その代表がオラース・ヴェルネ (Émile-Jean-Horace Vernet 1789-1863)。その《パリ市庁舎に向かうためにパレ・ロ



図4 テュルバン・ド・クリッセ《バッコスとアリアドネの結婚》(部分) 1834



図5 ポライウオーロ《アポロンとダフネ》 1480年頃 (ロンドン、ナショナル・ギャラリー)

ワイヤルを後にするオルレアン公》(1832)は、1830年の七月革命の同時代の歴史画として記念碑的な意味をもつ。ドラクロワの有名な《民衆を率いる自由の女神》(1831)は、このヴェルネの作品と対して鑑賞されてしかるべきだろう。《サンフォリアンの殉教》の失敗などに懲りてサロン出品を取りやめたアングルを尻目に、ヴェルネとドラクロワとが覇を競っていた状況は、例えばボードレールの1846年のサロン評にも見られるとおり。《アブラハムに追放されるハガル》(1837)は、そのヴェルネがオリエント旅行の体験を生かして、沙漠の光景のなかに旧約聖書の物語を描きだした顕著な東洋趣味の作例。1830年以降のフランスの北アフリカ侵略と植民地化の進展が、その背景をなし、ヴェルネは1844年には《オマール公によるアブドル・カーディルの移動陣地の奪取》と題する、全長28メートルに達する大画面を描いて、フランスのアルジェリアでの戦勝を記念する。

第三に肖像や風俗画に関しても、今回の

展覧会には、この時代の代表作が招来されている。まず、七月王政下、人物肖像で話題をまいた画家にアリ・シェフェール(Ary Scheffer 1795-1858)がある。ゲーテの悲劇『ファウスト』に題材をとった《糸巻きのマルガレーテ》(1831)と、1846年のサロンで評判となった《聖アウグスティヌスと聖モニカ》(1846)のレプリカとを並べて鑑賞できるのも、今回の展覧会の醍醐味のひとつだろう。前者の前景の糸巻きには晩年のティチアーノを思わせる奔放な筆致があって、端正な女性表現との対比が堪能できる。また後者には無限なる天国にあこがれる母と、まだ懷疑を捨てられぬ息子との視線が並ぶ。アスティアの地中海ならではの薄暮の空色と、ふたりを照らし出す夕刻の日差しが、いかにも甘美な感傷性を、いや増しに際立たせる(なお、図録の図版は、青が濃すぎて群青に近く、作品の印象とはだいぶ異なる)。この時代ならではの淡い青の色調は、アングルの弟子として著名な、イポリット・フランドラン(Hippolyte Flandrin 1809-1864)の《トロイアに向か



図6 レオポール・ロベール《夏の寓意》 1830

うギリシャ軍の動きを見張る、プリアモスの息子ポリテス》(1834)の、横むきの少年の裸体の背後に広がる空にも指摘できよう。この空があれば、1830年台半ばから40年代半ばの作、と見て間違いない。

時代はやや遡るが、レオポルド・ロベール(Léopold Robert 1794-1835)のイタリア風俗画の大作が日本では初めて、そろって対で展示されたことも、今回の展覧会の一収穫だろう。《春の寓意》(1827)はナポリを舞台とし、背景にはエトナ山が噴煙をあげている。対する《夏の寓意》(1830)はローマ郊外の湿地帯での収穫祭を話題とする。前者中央の娘が手にするタンバリンの皮に日差しが透けて見えるあたりの描写、あるいは後者の夕暮れの幾分物憂い空の微妙な色調なども、見所だろう。また下から見上げて、画面に照明が反射する角度を選ぶと《春の寓意》の画布の周辺には、四隅にわたって、以前展示されていた頃の傷が透けて見える。

水牛や牛車に引かれる田園風景は、この先クールベの《市から帰るフラジェの農民》(1850)のような、常軌を逸した寸法の農民画に引き継がれる。世紀末には、後に述べるフェルナン・コルモンが、旧約聖書を下敷きに人類史の黎明に遡った、壮大にして陰鬱なる大作《カイン》(1880)を完成するが、これはロベールの牛車の趣向を、先史時代の架空の光景へと換骨奪胎したもの、と見る事もできるだろう。

第四に、同時代の歴史主義に関しても、周到な選択がなされている。会場でひととき巨大な暗色の作品といえば、1831年のサロンに展示されて評判を呼んだ、ポール・ドラロッシュ(Paul Delaroche 1797-1856)の四作品のひとつ、《クロムウェルとチャールズ(特世)》(1831)だろう。畳に換算すれば4畳を超える画面は、額縁を含めれば150キロ近い重量級だ。ドラクロワの《民衆を導く自由の女神》が出品されたのと同じ年のサ



図7 ギュスターヴ・クールベ《市より帰るフラジェの農民》 1850 (ブザンソン美術館)



図8 フェルナン・コルモン《カイン》 1880（パリ、オルセー美術館）
 ＊図版6?8 収穫祭の練り歩きから、自宅への帰還、そして荒野の彷徨への半世紀。

ロンに出品された大作だが、斬首された国王の遺骸の生々しさを強調するために、画家はわざと室内を暗がり設定し、国王の遺体のシャツの白さと傷の血を際立たせている。遺骸を収めた棺は、間に合わせのように椅子のうえに置かれているが、その椅子の足の光沢の描写などには、近くで見ると、驚くほど大雑把な筆遣いが施されている。にもかかわらず、引きを取って見ると、これらの一見不正確にも見えた描写が、厳格な構図にピタリと収まる。

同じドラロッシュはパリ国立美術学校の半円形講堂に古今の巨匠を一堂に配列した、全長24.7メートルにおよぶ壁画を1841年に完成しているが、その下絵原画(1836)も展示されている。ここには古代ギリシャの建築家イクティノス、画家アペレス、彫刻家フェイディアスから始まって、イタリア・ルネサンスのレオナルド、ミケランジェロ、ラファエルロにくわえ、レンブラント、ルーベンス、ベラスケスなど、67名余ののぼる芸術家が登場する。登場する画家の名前を逐一記載した説明図を併置したほうが、一般観衆には親切ではないかと思われるが、これが当時の西欧絵画における名士列伝を構成しており、このような大作の注文をう

けたドラロッシュの定評をも裏書する。ここにも登場するティントレットを題材とした著名な作品としては、レオン・コニエ（Léon Cogniet 1794-1880）の生涯の傑作とされる《死せる娘を描くティントレット》(1843)が出品された。陰鬱な暗い赤を基調とした画面に、黒衣の厳肅な表情の画家が、今しがた身罷った娘に悲哀を湛えた眼差しを向けている。夭折した娘は、間接照明の燈色の光のなかに仄かに照らしだされる。まるで映画の一場面を思わせる一瞬は、当時大評判を取った。

最後に五点目として、1840年代を代表する宗教画が会場を圧倒している。ホルシュタイン公国出身のアンリ・レーマン(Henri Lehmann 1814-1882)の《預言者エレミア》(1842)には、ドイツのナザレ派に典型的な、くっきりとした明暗表現と精緻な陰影表現が鮮烈。エレミアの背後には災いの到来を預言する天使が見える。左手を指す天使の腕と指は、森村泰昌の新著『手の美術史』にも是非紹介して欲しかった逸品だが、その天使の白い肌と燃えるように鮮やかなオレンジ色の衣服は、背景の沙漠や紺碧の青空と対照をなし、あたりに光を放っている。これと並んで同じ壁面に展示されたのが、ス

図9 アンリ・レーマン《預言者エレミア》(部分) 1842
(『手の美術史』の 里程碑)

イス出身のシャルル・グレース (Charles Gleyre 1808-1874) の代表作《十二使徒の伝道への旅立ち》(1845)。長方形のうえに半円形の載った構図の中心に、磔刑の十字架があり、その足元から使徒たちが去ってゆく。レーマンがアングルの弟子だったのに対し、グレースの大作は、彼がドラロッシュのアトリエを引き継ぐ時期の、画家としてのひとつの「旅立ち」を画する作品だった。ともに幅は3メートル弱、高さは2メートル内外と、巨大な祭壇画への注文がなお支配的だった、宗教画最期の黄金時代の刈り入れ時を証言する。



*本展「フランス絵画の19世紀」は、島根県立美術館に続いて横浜美術館に巡回(2009年6月12日ー8月31日)。なお、掲載図版のうち、◎を付した2,3,5,7,8は島根展に出品されていない。また、上記以外の図版は同展図録より採らせていただいた(所蔵元の記載は省略)。

本稿簡略版が、この展覧会の公式サイトに掲載予定であることを、ひとことお断り申し上げる。 [筆者]